



文部科学大臣杯 第29回全国高等学校対抗選手権大会

12月23～25日 / 津グランドボウル



男子・名古屋工業高、女子・前橋高ともに初V

前回大会から三重・津グランドボウルを会場に開催されている『全国高等学校対抗ボウリング選手権大会』の第29回大会は、12月23日から25日までの3日間で熱戦が繰り広げられたが、男子は名古屋工業高(愛知)が、また女子は前橋市立前橋高校(群馬)がそれぞれ初優勝を飾った。(主催: (公財)全日本ボウリング協会)

優勝・前橋高



「団体では個人・団体で優勝するなど飛躍の年になった渡辺希哩選手」なかなか⑩ピンが飛ばなかったけど、10フレは外目にラインを変えてパンチアウトできた」

◀ともに初優勝の名古屋工業高(左)と前橋高

男子

予選(9G)を断トツのトップ通過だった前年優勝の沖縄県立首里東高(座波・宮城)をはじめ、上位4校がいずれも1回戦で姿を消すという波乱の展開のなか、優勝決定戦まで進んだのは、1年生コンビの日体大荻原高(大戸・植木)と、ともに本格的に始めたのは高校に入ってからという名古屋工業高(宮丸・及川・小柳)。

優勝決定戦は、ほぼ同ピンで10フレのアンカー勝負となったが、日体大荻原高の植木選手が2投目は⑩ピンタツで切れたのに対し、及川選手がパンチアウトを決めた名古屋工業高が418:408と10ピン差で制して初優勝を飾った。

勝った神奈川県立綾瀬西高(崎山・濱崎)が、2位で決勝に進むと、危なげなく優勝決定戦まで勝ち進んだ。反対のゾーンからは、その綾瀬西高を9ピン抑え予選を1位通過の愛知県立木曾川高(戸塚・林)を、2回戦で418:380と退けた前橋市立前橋高(大野・渡辺)が上がってきた。

優勝決定戦は、一進一退の展開のまま後半勝負へ。綾瀬西高はエース格の濱崎選手が「最後まで合わせられなかった」のに対し、前橋高の渡辺選手は、

10フレをパンチアウトで締め

て226と伸ばし、トータル405:367で綾瀬西高の連覇を阻止し、初優勝を飾った。

女子

女子は前年1年生コンビで優

優勝・名古屋工業高



「キャリアあわずか2年目で全国大会優勝の宮丸銀待選手」決勝トーナメントに入ってからはいよいよ優勝できてよかった」

▲10フレのパンチアウトで優勝を決めた及川翔平選手「決勝進出が目標だったけど、予選から調子がよかった。最後に優勝を締めくくっていい高校生活になった」

2位・日体大荻原高



▲優勝決定戦は3つのオープンを作った大戸奏選手「1年生で準優勝はうれしさもあるけど、まだまだ力不足を感じた」

▲1年生コンビで準優勝の植木詠章選手「予選終了後次点だと聞いたときはショックだった。それを思うと悪くない結果だけど…」

2位・綾瀬西高



▲決勝で快調なボウリングを展開した崎山穂花選手「いいチーム戦をできたと思うけど、やっぱり連覇をできなかったと悔しいです」

▲優勝決定戦はアジャストし切れなかった濱崎りあ選手「最後まであきらめないで頑張ったけど、悔しい結果に終わったので来年リベンジを…」



全日本ナショナルチームウィンターキャンプ

コロナ禍から脱却の年に

本来は1月9日から香港で開催された第26回アジア選手権に代表選手を派遣予定だったが、新型コロナウイルスの感染拡大の状況を考慮し、参加を断念した。代わって企画されたのがこのウィンターキャンプで、1月15日から4日間、神奈川県川崎市の川崎グランドボウルで、投げ込みを中心としたミニキャンプが行われた。

期間中の16日には、日ごろからナショナルチームの活動を支援しているスポンサーを招いて「感謝の集い」を開催、ナショナルチームメンバーと一緒に2ゲームのプレーを楽しみ、その後には表彰式を兼ねた懇親会が催された。



新年の抱負を聞く

北川 薫
(JBC会長)

コロナ解禁元年の気持ちで

スポーツ界もここ3年間はコロナの影響を受けてきましたが、JBCとしては、とにかく全国大会は実施しようという方針でやってきました。そうしないと選手の目標がなくなってしまいます。一方ナショナルチームについては、今回のアジア選手権を含め、国際大会にはほぼ派遣できていません。ナショナルチームメンバー

は、全ボウラーの憧れであってほしいし、業界の広告塔的な役割も担ってもらわないといけない。そのためには、彼らにもう少しスポットライトが当たるような工夫や、国際大会に出場するときの補償など、環境面の整備も必要です。そして今年がコロナ解禁元年というような気持ちで、国際大会に積極的に派遣したいと思っています。



下地 賀寿守
(ナショナルチーム監督)

カレントシステムへの対策も必要

状況を考えると致し方ないと思いますが、アジア選手権の出場断念は、選手のモチベーションを考えても非常に残念です。今の日本の位置づけを知る上でも、重要な機会になると思っていました。この大会はカレントスコアリングシステムが採用されていて、多くの国がアベ250アップというような、ハイスコアの

戦いになっています。1ゲーム中に7つ以上のストライクが必要という計算になります。とくにアジアでの国際大会は、今後このカレントシステムが主流となることが予想されます。最大目標である名古屋でのアジア競技大会(2026年)に向けて、それへの対応を図りつつ、メンバーを絞り込んでいきます。



▲スポンサーの方を招いてボウリング大会